

つながる医療。

も

ともとは工学部志望で、特に電子工学に関心が高かったのです」
周産期医療をリードするトップランナーの言葉に、取材陣はエリートと身を乗り出しました。

工学部から進路を変更して医学部に入ったという原教授ですが、産婦人科を離れた理由も「ニークー」。「新しい命が生まれるハッピーな所だし、何より妊娠管理、特に胎児が他の科と違って「目に見えない」ことにやりがいを感じたから」なのだそう。しかし、この「目に見えない」存在へのアプローチは、まさに電子工学的な考え方を要求するものでした。ここから原教授のある意味工学的な活躍が始まります。

「病気を正確に診断し治療を行うためには、体の中で何が起きているのを知ることがあります。私が医学部を卒業した頃は、胎児をリアルタイムで診断する方法がなかったんです」

胎児 すなわち見えない患者を診る。教授はそのための装置の研究に取りか

り、誕生したのが今ではどの産婦人科にもあり、内科でも利用されるようになった「超音波診断装置」です。同時期に手がけたのが胎児が24時間元気かどうかをチェックする「分娩監視装置」。妊婦さんのお腹にセンサーを付け、超音波を利用して胎児の心拍数や胎動を測るこの装置も、今は産婦人科ではおなじみの設備です。

さらに教授の開発は止まりません。この技術を進歩させ、妊婦さんが目の前にいなくても胎児の心拍数などが定期的に医師の携帯に届くシステムをも誕生させました。これなら妊婦さんの通院の負担も減り、診断する医師の負担も減ってお産に集中できますよな。

「実際に、6年前の皇太子妃、そして昨年の秋篠宮妃のご出産の際にも利用され、大変威力を発揮しました」

「これを電子カルテと組み合わせてネットワーク化すれば、病院などの際もスムーズに情報のやりとりができます。助産師さんや個人医院も協力してやってい

は

……と周産期のネットワーク構築に取り組み画像などの診療情報を取り扱ううちに、お産だけでなく医療情報全体を取り扱う「かがわ遠隔医療ネットワークK-MIX」が実現しました。医療機関が持っているCTやMRIなどの画像情報をネットワーク上で閲覧できるようにすることで、離れていても専門家によるより正確で効率の良い診断が行えるのがシステムの利点。医療格差の改善にも繋がるこのプロジェクトで原教授は今年、経済産業省などが行う「情報化促進貢献表彰」情報化促進部門で経済産業大臣表彰を受賞しました。

「この5年でネットワークは技術的に実現可能なものになりました。あとは社会で受け入れられるかどうかです」
周産期医療の状況を変え、情報のネットワーク化に取り組んでいく原教授。そのシステムは世界中の赤ちゃんと見守り、地域の医療に新しい芽がりをもたらそうとしています。

KEYWORD

[K-MIX]

「Kagawa Medical Internet eXchange」の略。医療施設や医師がX線画像などの患者のデータを通信回線を使ってやりとりし、専門医の助言を受けながら診療が行えるシステム。迅速で効率のいい診断が行えるのが特徴で、様々な医療機関が参加しネットワークを作っている。www.m-ix.jp



医療施設や医師と患者を高速ネットワークで結び、迅速で正確な治療を実現します。



胎児の情報を携帯電話で送受信。妊婦さんの移動の負担が軽減します。

周産期医療から医療情報のネットワーク化へ。



原量宏

PROFILE

はら かずひろ
医学部教授 医学博士
附属病院医療情報部 部長
専門分野：
周産期医療、医療情報学
地域医療情報連携システム